

鉄砲洲神社詩吟 素読論語解説
(平成 27 年 4 月 10 日)

【三三】子曰く、詐を逆えず。不信を億らず。抑も亦先ず覚るものは、是れ賢なるか。

洪澤栄一さんが面白い解釈をしておりましたので、ご紹介いたします。

孔子がいうには、この人は騙そうとしてはいないか。相手が自分を疑ってはいないか、私のことを信頼していないのではないかなどと余計なことを考えたりはしない。そもそも誠意を持って人に対していれば、相手が詐欺を仕掛けてくるとか、騙そう、または騙されはしないかという考えで近づいてくる人は、自然と心持ちが分かる。またそういう状況になるものが賢人といえるものだろう。

孔子は人が寄ってきたら自然と悪意を持っている人間かどうか早く分かるようにと、お弟子さん達に言っていると解釈できます。

現代にあわせてみると、最近はおレオレ詐欺が非常に横行していますが、おレオレ詐欺の対象になって電話が掛かってきても自然と対応できることが賢者というもので、賢い人です。それを「変なことを言っている」とピリピリしているようでは、まだ賢者とはいえない。春風が吹いてくるような感覚で相手の言うことを自然と聞いて「この子は違うことを言っているね」と自然と分かるようになるのが、人生の達人というあたりではないでしょうか。

自分はどうかと考えると、やはり難しいですね。おレオレ詐欺をする者は自然と信用をしてしまうようなものの言い方をしてきますから。

【三四】微生畝 孔子に謂いて曰く、丘 何ぞ是の栖栖たることを為すか。乃ち佞を為す無からんやと。孔子曰く、敢て佞を為すに非ず。固なるを疾みてなりと。

たぶん微生畝は、孔子の中で長老格ではないかと思えます。孔子にも色々とおアドバイスをしている先生格の人です。孔子のことを「丘」と呼んでいますから。

日本人は「先生」と言いますと敬っているように感じますが、中国人は「先生」と言っても敬っているわけではなくて、「孔さん」といつているような感覚です。孔子のことを「丘」

と呼び捨てですから、目下の者に対しての言い方です。

微生畝が孔子に、どうして、まだ仕官をしようと未練を残すのだ。うまいことをいって人を持ち上げて自分が世の中に用いられようとして、回りに良いことを吹聴しなさんな。おべんちゃらを言って自分を世に出そうとしてはいけない。孔子が答えて、「私はうまいことを言っているではありません。自分が段々凝り固まって世の中に役に立たなくなってくると、融通が利かなくなってくるから、自分もそうならないように、用心はしております。世の中に通用しなくなったら引っ込みます」ということを言っています。

世の中のためになりたいと思ってやっていると話しています。

『洙澤論語』で、洙澤栄一さんが自分自身のことを話している部分が、おもしろいので申し上げます。

『洙澤論語』を口述筆記したのは、洙澤栄一さんが86歳の時です。これだけの年寄りになっても世の中を憂えるし、国のことを真剣に考える。世の中のためになりたいと努力をして、あちこち動き回って、孔子の行動を真似したいと思う。孔子の後に続いて、世の中のためになることを実践したいと考えて行っている。普通は80歳を過ぎたら楽隠居をするものが当たり前だけれど、私は生ある限り楽隠居はしないで、命が尽きるまで世の中のためになることをして歩きたいと口述筆記で残しています。現実に洙澤栄一は、世のため人のためと奉加帳を持って色々な場所に寄付を頼みに現れたそうです。

私心なく、世のため人のために動いていると後世に名前が残るのだなと思います。